様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３２４２０５６

研究課題名（和文）ストリート・ウィズダムと新しいローカリティの創発に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Street-Wisdom and the Emergence of New Locality

研究代表者
関根　康正（SEKINE, Yasumasa）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：４０１０８１９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　29,100,000円

研究成果の概要（和文）：現代のネオリベラリズムに抗してストリート人類学を確立することが本研究の目的である。そのためにストリート・ウィズダムとローカリティの生成の実態把握を行った。研究成果のキーポイントは、中心からの徹底した一元化としての「ネオリベ的ストリート化」が作り出す敷居（ストリートエッジやローカルエッジ）での創発行動の解明にあり、そこでは「自己が他者化」するという動的過程が必ず見いだされ、それを「根源的ストリート化」と概念化した。エッジを不安定とともに生きている人々は現代人の生の本質を映す鏡である。その状況は「人が生きるとは何か」という哲学的究極の問いを現実的に問う。その探求にストリート人類学の存在意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims at establishing a street anthropology against the contemporary neo-liberalism. It has undertaken to grasp the actual condition of street-wisdom and the generation of new locality. The key point of the research results is in the elucidation of abductive activities in the threshold such as street edge or social edge which is created by the "Neo-liberalist Streetisation" embodying a thorough unification from the center, and furthermore in the exploration of the dynamic processes, in which self becomes other, inevitably found in such edges. I conceptualized is such processes as the "Fundamental Streetisation". People who are living with the instability of those edge must be a mirror that clearly reflects the living nature of contemporary people. The situation realistically asks a philosophical ultimate question "What a human living is." There is a raison d'etre of the street anthropology in its quest.

研究分野：文化人類学

キーワード：ネオリベラリズム　ネオリベ的ストリート化　根源的ストリート化　ストリートエッジ　共同性　被差別解放運動　敷居

１．研究開始当初の背景

トランスナショナル状況はネオリベラリズムと相応しながら展開している。ネオリベラリズムに主導された世界資本主義は、主流社会とアンダークラス（主流階級社会から排除された階級にさえ届かない社会層）という垂直的に分離したドゥルーズの言う「管理型」権力の分裂社会を生み出している。主流社会から棄てられた社会的弱者の分離社会の住人が、増大するアンダークラスであり、周辺化され搾取された後の敗北したローカリティである。ネオリベ的進化という観点で勝利する少数前者とそれに乗り遅れたり失敗した大多数のその意味で敗北する後者との分離は、後者の視点に立った現実の解明が、この富の配分の異常な不均衡・不平等を覆すためにまず取り掛かる作業であろう。人類学研究として棄てられた後者の生き様に寄り添って、彼ら彼女らの目線に近づいて、それでもなんとか生き抜くストリートの知恵を駆使した実践を知ることこそ課題になる。上からの言説空間に覆われた中で「下からの視線」で、現代社会を読み直す必要があるからだ。それは極端な敗北者のぎりぎりの創発の実態を知ることで、勝利の言説への幻想にとらわれた多くの普通の敗北者たちの覚醒を促し、社会の再統合への新しい想像力を拡大していくことである。

２．研究の目的

（１）主流社会のストックとプランを通念としたホーム中心主義的イデオロギー、すなわちネオリベラリズムあるいはグローバリズムとその作法が通用しない、無産（ストックなし）で明日の計画は立たないが、目前のフローを元手にしたストリートの戦術的生き延び方の知恵と作法についての繊細なエスノグラフィを作成する。

（２）さらに、それを基礎資料にして、生活基盤を一方的に液状化させ不安定さを増大させるネオリベラリズムの潮流のただ中において「生きられる場」としての「新たな共同性」を創発する方途を解明考察する。

（３）こうして、本研究は、「新たな共同性」とともに創発するストリートの知恵の蓄積を、社会全体が経験しているアイデンティティの不安定化をナショナリズムに退行することなく克服する前衛的な知恵として広く共有し活用するという問題解決志向的な基礎研究となる。

３．研究の方法

本研究は、上記の目的に沿って、少数に権力集中した主流社会とそこから排除されて周辺で棄民的状況を生きる大多数の社会的弱者とに分離した、いわば「分裂社会」化が進行している現状において、棄民されつつも生きている人々の現実の中に、このシステムを生き抜くために実践している、分裂社会の再＜接合＞の数々の試みの有り様を探り解明する。そのために、できる限り多角的な視点と綿密さをもって、その社会の周辺に入り込むような人類学的な現地調査を反復的に長期にわたり敢行し、そこから確実な現実把握の理論的展望を見いだすことがまず主要な実施計画方法であり内容になる。研究代表者、連携研究者 7 名（内 2 名が精神分析学者・心理学者）、研究協力者 10 名（内 4 名が外国人研究者）から構成される研究グループは、人類学的アプローチを中心に据えた上で、学際的かつ国際的な研究視点を含み込む点が、本研究計画・方法の特徴になる。その特徴を生かす研究交流のために、各人の 5 年間に渡る現地調査の成果は、随時、相互討論の場で共有され問題解明を進めた。特に最終年度は集中的な理論的検討を行った。

４．研究成果

現代社会をグローバルスケールで席巻するネオリベラリズムの経済思想状況は、1990 年代以降に顕在化したが、その始まりはすでに 1970 年代に起こっていた。ネオリベラリ

ズムは合理化・効率化・リスク化のランキング競争を通じて制度的再帰性を強化させることで、グローバルスタンダードに標準化させるという徹底した一元化を推し進める思潮である。

近代が科学と共に一旦は作り出した分化構造システムには少なくとも「内化・周辺化した他者」が含まれていた。しかし、現代のポスト近代においては、その脱分化運動によって最後の他者をも放逐して人間と集団の一元化に急速に向かっている。そのことは、すなわち、その一元化・標準化に沿わない人や物は徹底的に排除されることになる。排除された者たちは福祉で救済されることもなく、棄民される。すでに社会の支配様式は、「生かす権力」から「殺す権力」へと変質したのであり、一つの統合社会とは言えない「分裂社会」（格差社会という言い方は不適切であるし、よく見られる世代分断の議論も不十分なもので誤解を招くものである）の様相を呈している。ネオリベラリズムは、近代が世界的にまた国家的に産み出した支配の中心、半中心、周辺という同心円的統合社会構造を、突き崩しつつある。おおかたが半中心を占める市民的中間層を破壊していく。少数の支配中心という自己のみに資するイデオロギーすなわちネオリベラリズムが他者を自己化して肥大していく（経済的に富の極端な集中が起きる）。他方で、膨大な数のアンダークラスすなわち棄民（社会から棄てられた人々）が支配中心の自己とは無縁の外部にいる他者として発生・増殖してきている。アンダークラスはもはや周辺でさえない、標準外の群れとして例外状態に置かれる。例外状態の生は、隔離的管理の対象に過ぎないので、周辺存在の両義性という近代の中に残存していた意味づけももはや無効になる。メディアと警察と空間計画の共同管理が、少数のスーパーリッチと膨大なアンダークラスの間に新たなアパルトヘイトを持った「分裂社会」を生産維持し、後者の「剥き出しの生」を生きる（あるいは死ぬ）者たちは、下級民としての貧民（the poor as the lower class）でさえない、衣食も賄えない極貧者（paupers）としてストリートを彷徨う。ここに書いていることは大袈裟であろうか。1970 年代まで総中流意識などと浮かれていた日本社会が、現在では日本人の 6 人に 1 人が「貧困層」（「相対的貧困率」…一定基準（貧困線）を下回る等価可処分所得しか得ていない人の割合。厚労省は OECD の基準に基づき算定している。2012 年の場合、所得が 122 万円未満の人の割合を指す。）であるとされ、この３0 年程の間に日本の５分の１の世帯が年収 200 万円以下で生きている現実に転落し変化していることに戦慄を覚えないだろうか OECD 諸国の中でも「相対的貧困率」は四番目の高さである。そうならば、この先に、路頭に迷う日本人の群れを見ないとは限らない底なし沼の光景が見えないだろうか。これが、私の名付けるところの「ネオリベラリズムのストリート化」の先端の（殺）風景である。メジャーのネオリベ旋風が自己空間をグローバル・フローで標準化（一元化）し、そのストリート的な見せかけ（すでにストリートは殺されているので）の下で巨大なホーム化（ホームしかなく、それ以外は荒野）を実現しつつあるのである。その旋風に吹き飛ばされてネオリベ自己空間の外部に投げ出され死ぬまでの期間、メディア一括管理の下に置かれている姿である。

こうして、悲惨な極貧者が彷徨う路頭ないしはストリートエッジが、奇しくもクローズアップされることになったのである。それがネオリベラリズムの真実の現実の陰画なのである。その意味で、今日の paupers あるいは homeless は、このネオリベ社会の特徴を私たちに見せつける拡大鏡にすぎないのであって、明日をも知れない不安定 uncertainty という paupers の特徴は、今日

の若年層の、そして少し前までの総中流意識の幻想覚めやらぬ中高年層のただいまの生活の真相なのである。泡沫の幻想を振り払い、福祉少なき社会をパノプティコンのごとき監視管理の下で現実には生きていることに、すなわち自分が、少数スーパーリッチの住む gated community の堅固な高塀の中ではなく外にいる大多数の一人であることに気づく時が来ている。この気づきにストリート人類学の眼目がある。したがって、私たちは何も好き好んでストリートエッジの paupers を追いかけているわけではなく、その現実に私たちが今生きている社会の真相が映じているからである。人類学実践の行われるべき中心的な場なのである。ネオリベは本当にストリートを完全に殺したのか、今もう少し確かめておきたいのである。どのように瀕死であるのか、瀕死であることは確かだが、甦る可能性はないのか、などと問い続けたい。

そうなおも問うのには、理由がある。ネオリベ自己空間の外部に投げ出されても、塀の外でも例外状態といわれようとも、そこで人間はまた生活を営む力を有しているからである。Uncertainty をなんとか少しでも安定化させようと必死になる。諦念や無感覚という退出もそこに含まれるだろうが。死に隣接した極限的状況の中での人間の創発力が、ストリートエッジで発現しているからである。それを事実目撃できるからである。もちろん膨大な犠牲を伴いながらであるが。犠牲を出しながらも何かをつかみ出し作り出す。一見無に見えるところから有を産む創発の実践が見えるのである。それを解明したい。解明する必要がある。塀の外部に生きる膨大な人々の今後のために役立つ覚悟と知恵と実践方法が発見できるに違いない。今日多くの人たちの身の上にもたらされつつある経済と精神の貧困から抜け出す道筋を知りたいのである。家もなく無産なのに、ストリートエッジの明日をも知れぬ不安定 uncertainty の中でそれでも死なずにそれなりに元気に生きている人々がいる。その状況は、究極的に「人が生きるとは何か」を哲学的思弁的にではなく現実的に問いかけるものであろう。その問いを多くの場所と事例から一緒に考えて探索していきたい。そこにストリート人類学の意義がある。

死にそうだ、もうだめだ、・・・そして実際に死んでしまうこともある。だが死なない場合もある。死なない場合はどうしたのだろうか、何が起きているのだろうか。先取り的に言うと、閾ないし敷居を発見したのだ。0 度で水が氷になるように、100 度で水が水蒸気になるように、私たちの人間の現実にも敷居がある。その転換点において私たちは違った想像力を獲得する。端的に言うと、ネオリベが主導するような他者を排除した自己中心のメジャーな見方すなわち「ネオリベ的ストリート化」での想像力では見えない、新たなもう一つ別の次元の想像力が確かにある。それは、他者の受容によって起こる自己変容という動的過程においてまさに創発する想像力である。メジャーになることとは真逆の「マイナーなもの」になることで見えてくる地平である。ある文脈で今の自己が到来する他者に包み込まれるときに、創発が起こる。この「自己が他者化」するという動的過程を、私としては「根源的ストリート化」と呼んで概念化しておきたい。なぜ根源的と形容するのか。それは、現代のネオリベ思潮という歴史拘束的な次元を超えている、より長波の人間の生の在り方（普遍とまでは言い切れないが）を指し示していると思われるからである。ここでもすでに私たちの思考の下敷きになっている、歴史的・認識的因果よりも動物的・実践的の回帰を含む現代の厚みを把握したい（cf.『変形する身体』A.リンギス：身体的内観の勝利）。先人の数々の偉大な業績があることは言うまでもない。表象から表現へ、行為と創発、自己が他者になるアイデンティ

フィケーション、M.フーコーのヘテロトピア、C.レヴィ＝ストロースの野生の思考やブリコラージュ、C.パースの記号過程、西田幾多郎の主語と述語の無への深化、G.ドゥルーズのマナーなものへの生成変化、動かないノマド、W.ベンヤミンの敗北の歴史、などである。いずれにも貫かれているある思想的なキーポイントがある。歴史的常識に依存した特殊的な自意識を突き破る単独的な「高貴な」自他以前の噴出である何かである。

ネオリベラリズム批判は、私がこの時代を生きる研究者であることにおいて抱える不退転の意志である。研究の当事者性というものである。しかしながら、そのことは、ここでの考察がこの時代だけに限定されることを意味しない。人類学は人間が人間として生きるとは何かを問う、もう少し長波の課題を持っている。この時代に巡り会い、ストリートエッジを彷徨する極限的な人々の生において、自らの生を豊かにする根源的問いに出会っているのだと思っている。その思考の軌跡がこの成果である。

その要点は以下のようである。

（1）メジャー・ストリートの暴力と排除：棄民された人々：ネオリベ近代（ポスト近代）も近代には変わりないが、社会的再帰性が進んだことで排除性と暴力性が格段に高まっている。近代テクノロジーと資本の産み出した途轍もない放射能汚染による故郷喪失、想像を絶する児童福祉施設暴力、植民地近代が固定化した不可触民差別の深刻さ、そういった社会の底辺で呻吟する人々は私たちが生きる近代システムの負の犠牲者つまりホームからストリートに投げ出されている。今私たちは、このような顛末の近代の過剰としてのメジャーな潮流である「ネオリベ・ストリート化」に対して、犠牲者救済の立場ではなく真摯に当事者として対峙することが求められている。

（2）ストリートの奥へ：敷居の発見：「ネオリベ・ストリート化」によって棄民された人々の彷徨う空間はストリートいやストリートエッジである。こうしてストリートエッジが研究対象に据えられる。ネオリベ化が進む現代社会のストリートエッジは意外にも見えにくい。空間の広がりと時間の重層が詰め込まれたストリートを遊歩し、ストリートエッジすなわちもう一つの想像力の入り口としての敷居を発見するために目を凝らす必要がある。「見るなの禁止」が作動するその場所で立ち会うように見続ける、そうすることで、そこから「根源的ストリート化」を思考するストリートの深層に入り込んでいくことが重要だ。深層心理学の知見が人類学と出会う。

（3）ストリートの奥から：敷居の自覚：ここではネオリベ・ストリートのストリートエッジであるローカリティやエスニシティをノスタルジアという概念を介して、分断・不連続の亀裂が敷居に見立てられて、それが欠損として共同的に共有的に自覚し直され、その亀裂を補綴しようとエネルギーが生成するという事例が取り上げられる。「根源的ストリート化」を介して内外・自他を超える「共当事者性」を生成する記号過程を解明する。

（4）マイナー・ストリートの創造力：敷居の創発：ネオリベラリズムに席巻され追い込まれ敗北したかに見える人々の生き様の現実に接近してみると、敷居の発見、自覚を通じて創発的にネオリベを織り込んだブリコラージュの豊かな表現実践・記号過程が見て取れる。これをマイナー・ストリートの創造力と呼びたい。受動を能動へと転換して生き延びているストリートエッジの生活の想像力と創造力に、ネオリベ一元化に粘り強く抗する知恵と技法が見出され、それを外界の環境に働きかける実践というデザイン概念の本義に立ち返ってヘテロトピア・デザインかつグローバルデザイン（協働的デザイン過程）として概念化することが試みられる。

（5）「ネオリベ・ストリート化」から「根源的ストリート化」へ：（4）で見出したことを、ストリートエッジという敷居での動態が有する「根源的ストリート化」と見定めて、＜コモン＞を構築しつつ生活基盤にするような生活原理及び社会構築の原理を結論的に論証する。これが、「ネオリベ・ストリート化」を生産的に批判し乗り越えて、人間が人間として生きられる場所（死の哲学を内包した共同性）の構築の方途を示す基礎研究であることが本書の意義である。主語は常に述語に飲み込まれる西田哲学やシンボルがイコンへと差し戻されるパースの記号学や生は死を媒介して生の奔流を生産し続けるバタイユやリンギス哲学的人類学が、人類学的実証研究と出会うところに生まれる人間学の提唱である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 30 件）

①小田亮、「アクチュアル人類学宣言！―対称性の恢復のために」、『社会人類学年報』、査読有、40 巻、2014、pp 1-29

②関根康正、「放射能汚染社会におけるストリート人類学」、『民博通信』、査読有、No.142、2013、pp.14-15

③Sekine, Y., “ Transnationality, Hope and ‘ Recombinant Locality ’ : Knowledge as Capital and Resource ” South Asia Research, 査読有, 32(1), 2012, pp.1-20

〔学会発表〕（計 32 件）

① Sarah Teasley,‘Design policy: Local futures and technocratic dreams’, Design History Society annual meeting, 12 September 2015, San Francisco(US),査読有

②Yasumasa SEKINE,
The Challenge of Street Anthropology, IUAES Inter-Congress2014,16 May 2014,Makuhari Messe(Chiba, Makuhari).

③関根康正、「＜地と柄＞論再論：「夜の夜」という視点が拓く世界」、岩田慶治先生追悼シンポジウム「草木虫魚と向きあう」、2013 年 10 月 19 日、国立民族学博物館（大阪府・吹田市）

〔図書〕（計 25 件）

①Sekine, Y., and Yamakoshi, H., Street Art/ Graffiti in Tokyo and surrounding districts, in Jeffrey Ian Ross ed. Routledge Handbook of Graffiti and Street Art, London:Routledge, 2016, pp.345-356,査読有

②鈴木晋介、『つながりのジャーティヤ―スリランカの民族とカースト』、2013、法蔵館、398

③Sekine, Y., Monika Salzbrunn, From Community to Commonality: Multiple Belonging and Street Phenomena in the era of Reflexive modernization, 2011, Center for Glocal Studies, Seijo University,103

６．研究組織

(1)研究代表者
関根　康正（SEKINE, Yasumasa）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：40108197

(3)連携研究者
野村　雅一（NOMURA, Masaichi）
国立民族学博物館・名誉教授
研究者番号：60142014
小田　亮（ODA, Makoto）
首都大学東京・都市教養学部人文社会系社会人類学分野・教授
研究者番号：50214143
鈴木　晋介（SUZUKI, Shinsuke）
茨城キリスト教大学・文学部・助教
研究者番号：30573175
和崎 春日(WAZAKI, Haruka)
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号: 40230940
近森 高明（CHIKAMORI, Takaaki）
慶應義塾大学・文学部人文社会学科・准教授
研究者番号：10411125
北山 修（KITAYAMA, Osamu）
九州大学・大学院人間環境学研究院・名誉教授
研究者番号：80243856
南 博文（MINAMI, Hirofumi）
九州大学・教育学部教育心理学系・教授
研究者番号：20192362

(4)研究協力者
Sarah Teasley
Monika Salzbrunn
阿部 年晴（ABE, Toshiharu）
Thomas Gill
朝日 由実子(ASAHI, Yumiko)
村松 彰子(MURAMATSU, Akiko)
西垣 有（NISHIGAKI,Yu）
内藤 順子（NAITO,Junko）
Shanmugampillai Subbiah
根本 達（NEMOTO, Tastushi）